

金魚草に就いて

東京女高師教諭 大 岩 金

栽培方法が極めて容易で花は充分賞玩する價値がありまして秋に播種して春開花する金魚草に就きまして簡単に申し述べたいと思ひます。

尙一言附け加へて申し上げたいのは是等の草花は比較的早春から開花させる事が出來ますので子供が春の日長に御菓子をねだる時などに子供の心を汲んで母親自らが是等の花をつんでその時の御菓子の代用と申すも妙でありますが長閑な春の若葉の蔭に莖を敷き是等の花を以つて、おまゝごとなど致させますれば、もはや前のお菓子のことなど打忘れて大層喜んで遊ばせることが出來ると云

ふ、只花の美を賞する外にも利用の出來るもの、一つであります。

金魚草は栽培の仕方によりまして、多年性とも二年性ともなるものであります。葉は長橢圓形、莖は喬性、中性、矯性等ありまして六七寸から二尺位に成長致します。花の一房としての形は穂狀で花一個は筒狀であつてその開花したものは丁度金魚が口を開いたやうで誠に趣のある花で爲に此の名があるのだとも云はれて居ります。そこで花の色には白、黄、紅、深赤、淡黄、絞り等種々あります。それ故金魚草一種類を植ゑ込みましたも

色彩上變化のある美しい花壇を造る事が出来ます

作り方

一、繁殖法

イ、實生法

一般にはこの實生法によりまして繁殖致します。

A、秋蒔

普通は秋蒔きに致します。種子は黒褐色で極めて小粒でありますから充分注意して蒔く必要があります。 (蒔方に就ては前に述べてありますから略します。)

B、春蒔

全然霜除の設備の出来ない場合又は簡単な霜除位では越冬し難いやうな場所又は花期を遅らしたい時などには春蒔にするのであります。

ロ、挿木法

時には充實した新芽をつんで挿木することもありますが只今は詳述することを略します。

ハ、古株で越冬させること。

是は開花後莖を二三寸に切りましてその株を適當な場所に埋めて冬は霜除をして霜害を受けないやうに保護して翌春になつてから植ゑ出すのであります。

二、播種後の管理

發芽しまして本葉が二三枚出ました時に第一回の移植を致します事は一般の草花におけると同様であります。そして秋蒔きでありますと霜の降る頃までには相等に成長して莖も丈夫なものに育てゆきます。そして降霜の頃までに三四寸も伸びて本葉もかなり澤山出ましたら三四枚を残して摘心致します。摘心致しますと葉腋から枝が出てこもりと茂つた株になるのであります。そして降霜の頃になりましたならば霜除をしてやります。

秋蒔に致しましても降霜の頃になりまして大面積に渡り霜除の出来難い場合には苗床で越冬させ

まして翌春霜がおりなくなりまして、思ふ場所に植ゑ出す事もありますが、此の方法は苗を徒長させましたり、密植のため發育不完全な状態を示す事などありまして好ましくありませんから、此の方法をとります場合にはなるべく薄く蒔き且つ發芽後あまり密生して居る所は間引きまして空氣の流通をよくしてやる様に注意するのであります。

次に春蒔に致しましたものも、發芽後の管理は秋蒔のそれと略同様でありますがこの場合には勿論霜除をする心配はありません。又成長が速で開花する迄に要する日數も割合に短かくやがて暑氣になりますので充分繁茂をとげないうちに開花致します爲に秋蒔に比べて見おとりのする事が多いのであります。

次に肥料の事ではありますが是は一般の草花と同様でよいのであります。即ち元肥としましては油粕に過磷酸石灰を加へたものを少量施しまして補

肥と致しまして人糞尿又は油粕のよく腐熟致しましたものを薄めて時々施します。

病蟲害、是と云ふ病蟲害は殆ど發見されないやうであります。至極手間のかゝらないものであります。

三 開 花

前年からの古株が一番早く開花致します即ち五月始めから咲き初めます。次に秋蒔のもので最後に春蒔が開花すると云ふ順序であります。

そして一株としての咲く順序は中央の莖の蕾から最初に咲き順次側方の葉腋から出た枝の蕾に咲き及ぶのであります。それ故に中央の花が咲き終りましたらその部分を切りとつておきますとその下部の葉腋から出た枝の花が咲きます故一株の金魚草で非常に長時間の開花を見る事が出来ます。その上前に述べましたやうに播種時を違へたり古株で越冬させる事などによりまして開花の時期が

異なりますから夫等をよく鹽梅致しますれば五月頃から十月頃までも絶えず花を賞玩する事が出来ます。

四 種子の採り方

花が終りますと袋のやうな果實が出来ます。始めのうちは青いのですが成熟致しますと暗褐色となりやがて袋の上方に穴があきます。その内部は三室に分れて居ります。長い花軸に澤山ついて居りますからそれを軸のまゝ横に倒さないやうに切り取り之を逆にして振りますれば随分澤山の種子がとれますから一株ありますればかなりの大面に蒔く事が出来ます。それ故に家庭で始終賞玩しやうとする時には各種の色を一株づゝ距離をおいた他の場所に植ゑておくとか、多い中に目ざはりにならないやうな所に印をつけておいてその分丈結實させるとかして採種し他は花の終り次第摘み取つて又次の花を咲かせるのに勢力を弱めないやう

にしてやればよいのであります。

又學校、幼稚園、その他夏休みのあるやうな所で栽培するのでありますならばこの期を利用して休みの間に結實したものを採種すればよいかと思ひます。それを袋に入れて名稱をつけ他と混交しないやうに又鼠などにおそはれる事のないやうに保存しておいて來る秋を待つて前同様の方法で蒔くのであります。この様に取扱ひますことはいづれの種子も同様であります。

特徴及び利用

先づ主なる特徴を列舉致しまして次に其の特徴に對する利用を少し述べて見たいと思ひます。

- 一、栽培の容易なこと
 - 二、開花期間の長いこと
 - 三、花の色に種々あること
 - 四、花の形に趣のあること
- 一、美しく咲き誇つてゐる金魚草に接すると同

時に栽培の容易であると云ふ事を知りきしたならば誰も自ら培つてみたい氣持になるだらうと思ひます。或は花壇に或は鉢に或は切花用としていづれに致しましてもよいものであります。

二、開花期間の長いと云ふことは花壇などに植ゑ込みます場合には望ましいのであります。春に植ゑ込んでおきますればその後はさしたる手入も要しませず又度々他のものと植ゑ替へます事もしないで絶えず花を見ることが出来ること云ふ事でもあります。そして又株そのものを更新すると云ふ事でもあります。即ち花壇で相當の期間觀賞した後に切花として刈り取り他に利用する時はその切り取りました株から新芽を生じ次第に成長しまして再び以前に劣らない花壇が出現することであります。それでその切り取つた花は或は床の間を飾り或は食卓を賑はし又子供等はその花で楽しい日を送ることも出来ませう。

三、花の色の種類が多いと云ふ事は毛氈花壇などを造ります場合には必要なことであります。即ち金魚草一種類で各種類の色を配合よく取り合えます時には他の各種類の草花を取り合せて造りました花壇よりもあつさりと致しまして却つてゆかしい感じのあらはれるものであります。又此金魚草には草丈に喬性、中性、矮性の性質を持つたものがありますから是等の特性をも前者に加味してポーター或は普通の花壇等を造る事も出来る譯であります。依つて金魚草は一般に花壇用草花として利用して最も望ましく且つ利用價值の大なるものと信じます。

四、花の形に趣のあると申しますことは前述致しましたやうに開花致しましたものが金魚が口を開いた様な形をして居りますからでありませう。そこで是を子供のおまゝごとゝして用ひます時に都合のよい事があるのであります。それは花の色

が種々ありますので例へば赤い花の浸出液を造り
 白い花に盛ると云つた様な具合に種々な色の花の
 浸出液を種々な花に配合よく盛り可愛い、お客様
 の御馳走として進めます。その場合盛る花はお椀
 となりお茶碗となるのであります。然し此際お椀
 の臺として粘土のお團子を造り上の中央に穴をあ

けて挿し込み倒れるのを防ぎます。或は種々の色
 の水を賣る製造及販賣者となり買ふ買手となる事
 も出来ますしこのデリケートなおまゝごとはやが
 て色の名を知り色の配合の美を知るでありませ
 う。

附 記

秋に播種する草花の種類

花 名	播種法	開花期	花 色	草 丈	性 質
アネモネ	鉢、床	三月五 <small>月</small>	紅、紫	五寸八 <small>寸</small>	球根
金魚草	床	第一回 四月七	赤、白、黄、鳶、絞	五二〇	二(多)年性 (半耐冬)
金盞花	床	三—五	樺、黄	七一〇	二年性
パンジー	床	三—五	白、黄、紫等	三—五	二年性
石竹	床	四—五	桃、白、赤等	五—八	宿根性
デジ	床、鉢	四—六	白、紅、濃紅	三—四	宿根性
フロックス	床	四—六	赤、青、紫、白等	四—一〇	二年性

勿忘草	鉢、床	四月	青、白	三寸—六寸	二年性
ルーピナス	直	四月—六月	白、黄、青等	一〇—一五	二(多)年性
スキートビー	直	四月—六月	紅、白、桃、紫等	四〇—五〇	二年性
花菱草	直	四月—六月	黄、白	一〇—二〇	二年性
ヒナゲシ	直	四月—六月	紅、赤、白	一〇—二〇	二年性
千鳥草	直、鉢	四月—五月	白、桃、青、絞等	二〇—三〇	二年性
矢車草	床	四月—五月	白、桃、紫等	二〇—三〇	二年性
オダマキ	床	四月—六月	青、紫、黄、紅等	六一—一〇	宿根性
蟲取撫子	床	四月—六月	牡丹	一〇—二〇	二年性
撫子	床、鉢	四月—五月	牡丹、赤、白、絞等	五一—一〇	二(多)年性
ロベリア	鉢	五月—六月	青	三—五	二年性(半耐冬)
ストツク	床	四月—五月	淡紅、黄、樺等	五一—一〇	二年性(半耐冬)
カーネーション	鉢、床	四月—六月	赤、白、紅、絞等	一〇—二〇	宿根性